
三国恋戦記 二次小説 ～黄昏の口付け～

クレハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三国恋戦記 二次小説 〱黄昏の口付け

【Nコード】

N7595L

【作者名】

クレハ

【あらすじ】

乙女ゲーム「三国恋戦記 〱オトメの兵法！」の二次小説です。花×孔明のカップリングで、孔明エンド後のお話になります。キャラクターの雰囲気は壊れないよう気をつけたつもりですが、なにぶん稚拙な文章しか書けないので不快な思いをさせてしまったら申し訳ありません。内容的にはそれほど甘さはありませんが、ほのぼのとした感じが出ていれば嬉しいです。

（前書き）

乙女ゲーム「三国恋戦記 ～オトメの兵法！～」の二次小説です。
花×孔明のカップリングで、孔明エピソードのお話になります。
キャラクターの雰囲気が壊れないよう気をつけたつもりですが、
なにぶん稚拙な文章しか書けないので不快な思いをさせてしまった
ら申し訳ありません。
内容的にはそれほど甘さはありませんが、ほのぼのとした感じが出
ていれば嬉しいです。

「師匠、この書簡はどうしますか？」

「ああ、仕分けしてそっちに置いておくのかな。それが終わったら休憩していいよ」

「はい」

師匠と想いが通じ合って、この世界に残ることを決めたあの日から数日。

心の片隅にあったもやもやはすっかり消え失せ、
相変わらず師匠の補佐として忙しく働く日々が続いていた。

恋人同士の甘い雰囲気……という風なものはあまりないけれど、

師匠と一緒にいられる、それだけで私はとても幸せだった。

（本当、なんだか幸せすぎて怖いな……。

師匠のことで悩んでいた時は、まさかこんな日が来るなんて思いもしなかった）

（だけど、あの時……師匠が私を想ってくれていたってわかって、

私も師匠に好きだって言って
（

「・・・・・・・・」

急にその時の情景が鮮やかに思い出され、私の頬は自然と熱くなつてしまつた。

(う・・・・・・・・だめだめ。仕事に集中しなきゃ・・・・・・・・)

「花」

「は、はいつ!？」

顔を上げると、すぐそばに師匠が立っていて私は必要以上に驚いてしまつた。

「どうしたの、そんな幽霊でも見たような顔して。・・・・・・・・あれ？　ちよつと顔赤い？」

「き、気のせいです。別に師匠のことを考えてたとか思い出してたとかじゃなくて」

「思い出す？」

(わつ・・・・・・・・口が勝手に・・・・・・・・!)

「あ、あの、とにかくなんでもないのでから」

「・・・・・・・・ふーん、そつかそつか。ほんと、君はかわいいなあ」

(う・・・・・・・・み、見破られた・・・・・・・・?)

いつものように余裕の笑みを浮かべる師匠に、恥ずかしい気持ちと同時に

ちよっぴり腹立たしくなる。

どうして、この人はいつでもこんなに余裕があるんだろう。

（私なんて師匠の言動に振り回されてばかりなのに……）

「さてと、仕事もひと段落ついたことだし休憩しようか。
ボクはちよつと外に出るけど君はどうする？」

「あ、私も一緒に行きます」

「うん。じゃあ行こうか」

師匠の後に続いて行くと、そこは中庭だった。

もうだいぶ日も暮れてきて、綺麗な夕焼けが空を覆っている。

私と師匠は二人並んで芝生に腰を下ろした。

「ふわあ、今日もなかなか忙しかったね。疲れた？」

「あ、はい、ちよつとだけ。でも大丈夫です」

「君は何を聞いてもその一言で片付ける癖があるからなあ。頑張るのはいいことだけど、

疲れた時は無理せずちゃんと言っただよ？」

「はい」

（無理……かあ。そういえば師匠って疲れたとか眠いとかはよく言うけど、それ以外の愚痴ってほとんど言わないな）

「……師匠こそ、あんまり無理はしないでくださいね。私じゃまだまだ頼りないかもしれませんが、もっと師匠の役に立てるよう頑張りますから」

「君は十分役に立ってるよ。もっと自分に自信を持ちなさい」

「……ありがとうございます」

「でも、あんまり君が優秀になって追い越されても困るなあ。師匠としての立場がなくなるよ」

顎に手を当てながら師匠が冗談っぽく言った。

「うそばかり……私に師匠が追い越せるわけないじゃないですか」

「そうでもないかもしれないよ？ 何が起こるかわからないのが人生だからね」

「君があの本に導かれてこの世界へやって来て、ボクは『君』と再会を果たし、

君は『ボク』と出会った。9年の時を超えた邂逅なんてそうそうあ

るもんじゃないだろう?」

「ま、まあ確かに、それはそうですね……」

ふと、私は以前から気になっていたことを師匠に聞いてみることにした。

「……師匠。師匠って、どうして今みたいになっただんですか?」

「んー? どういう意味?」

「えっと……その、なんて言うか、亮くんとは雰囲気も口調もだいぶ違うなあって思ってた。」

昔はもっとうろ……真面目な印象でしたよね?」

「それって、今のボクは真面目じゃないってこと?」

「そ、そういうわけじゃないですけど、何があって今の師匠になったのか気になって……」

否定も肯定もできるような質問にあたふたしながら私が答えると、師匠は軽く溜め息をついた。

「ま、いいけど。しよっちゅうふらふらしてるのは事実だし」

「それでさっきの質問だけど、まあボクにも色々あったってことだよ。」

時代が流れていくように、人も移り変わる。すべてが同じままでいられる人間なんていないよ」

「・・・・・・・・」

（時代が流れていくように、人も移り変わる・・・・・・・・か）

（人が同じままではいられないなら、今のこの師匠への気持ちも、いつかは変わっちゃうってことなのかな）

（そんなのいやだ。この気持ちだけは変わらないって、信じてる）

（・・・・・・・・自信がある。きっと、絶対に、私はずっと師匠のことが好きだ）

「・・・・・・・・でも、変わらないものだってありますよね」

「そうだね。ボクの君に対する想いとか」

「！ し、師匠っ！」

「あはは、真っ赤だよ。君が夕焼けみたいだね」

師匠が楽しそうに笑い、反対に私は恥ずかしくて居たたまれなくなつた。

（うつ・・・・・・・・やっぱり余裕だ）

「・・・・・・・・師匠って、いつもそうですよね」

「ん？」

「飄々としてるっていうか、どんな時でも動じないし、余裕があるじゃないですか」

「余裕？ そうかなあ」

「そうですよ」

「・・・・・・・・・・」

私が頬を膨らませながらそう言うと、師匠はふいに空を仰いで小さな声で呟いた。

「・・・・・・・・・・余裕なんか、本当はないよ」

「え・・・・・・・・・・？」

普段とは全く違う声音に驚いて師匠を見遣ると、その横顔はどこか物憂げだった。

「君といると、余裕でなんかいられない。そう見えるんだとしたら、それはそう見せかけてるだけだ」

「ボクは君の師匠だけど、同時に一人の男でもある。・・・・・・・・・・言ってる意味、わかる？」

「・・・・・・・・・・師匠」

思いもよらない言葉が返ってきて、思わず師匠をまじまじと見つめてしまう。

と、その時　　ふいに私の視線と師匠の視線が交差した。

心臓がドクンドクンと音を立てはじめ、鼓動が速くなる。

「あ、あの……………師匠……………」

「何？」

「その……………え、っと……………」

（ど、どうしよう。なんか、声が震える……………。
師匠がそんな風に真っ直ぐ見るから……………）

「……………」

何とも言えない微妙な沈黙が流れ、やがて先に口を開いたのは師匠のほうだった。

「……………君が黙ってるなら、ボクから先に言おうかな」

そう言うと、師匠の手がそつと私の髪に触れてきた。

そのまま優しく髪を撫でられ、その指がゆっくりと顎を持ち上げる。吐息がかかるくらいすぐ間近に師匠の顔があり、それだけでもう心臓は爆発寸前だった。

「逃げたいなら、今のうちに逃げるといい。」

もっとも、この手が放せるかどうかボクにもわからないけどね」

「……………」

「……………どうする？」

「・・・・・・・・そんなの・・・・・・・・」

師匠はずるい、と思った。

そんな風に甘く囁かれて、嫌だなんて言えるわけがない。思っはすがない。

だって私は こんなにも師匠のことが好きなのだから。

音もなく日が沈んでゆく中で、柔らかな風が吹く。

それはまるで追い風のように私と師匠の距離を一気に縮めた。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・っ」

とても温かくて、優しい口付けが交わされる。

これまでにないくらい師匠のことを近くに感じられて、その幸福感に目が眩みそうだった。

（まるで、唇が触れあっているところから想いが溢れてくるみたい・・・・・・・・）

（もう、私には師匠しか見えない。きっとこの先も、ずっと・・・・・・・・）

長い長いキスの後、どちらからともなく唇を離し、私は師匠の胸に寄り添った。

「・・・・・・・・・・師匠」

「どうしたの？」

優しい眼差し、優しい声、師匠の体温。
それらをすぐそばで感じているうちに、自然と私の口からは言葉が溢れ出た。

「大好きです。・・・・・・・・孔明さん」

「」

師匠の黒い瞳が一瞬大きく見開かれ、だけどそれはすぐに穏やかな笑顔に変わった。

「・・・・・・・・ほんと、君には参るよ。9年前からずっとそうだ。
ボクの心を惹きつけて離そうとしない」

「だから、ボクも君を離さない。・・・・・・・・君が望む限り、
君がボクの隣で笑っていてくれる限り、ボクはいつまでも君のそばにいるよ」

「・・・・・・・・好きだよ。花」

そうして、私たちは2度目のキスを交わした。

お互いの想いを確かに感じながら、いつまでも

・・・・・・・・

（後書き）

花と孔明のお話はいかがでしたでしょうか？ 少しでもお楽しみ頂ければ本当に嬉しいです。

ご意見・ご感想などもお待ちしておりますのでお気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7595l/>

三国恋戦記 二次小説 ～黄昏の口付け～

2010年10月11日15時35分発行